
ゼロ魔の大革命

SPQR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ魔の大革命

【Nコード】

N5520N

【作者名】

SPQR

【あらすじ】

ルイズ嬢に召喚された使い魔は、才人君じゃありませんでした。

才人君より弱く、根性も無い平凡な大学生、真吾です。

彼は、義務より権利こそ愛する現代日本人なので、抑圧的な身分社会や、信仰の自由を抑圧するブリミルは、大嫌いです。

彼は自分の権利を確保する為に、今日も異世界で頑張ります。

プロローグ

俺の名は、かがみしんご各務真吾。

ついさっきまで、都内で、ごく普通の大学生をやってました。過去形と化した原因は、運命の神様にある。

最近の神様と言うのは、非常識だ。

昔から、自らが生み出した種族の中で、これと思った個体に祝福を与え、彼ら英雄の軌跡を眺めて、自らの無聊を慰めていた。

それが、神と箱庭せかいの正しい関係であつたと思う。

しかし、元々、退屈凌ぎの悪戯で、魔王やら勇者を創った神様なのだから、マンネリ打開の為、段々とエスカレートしていくのは、まあ理解出来ないことも無い。

他の神々の箱庭から、いたいけな小市民を召喚と称して拉致つて来て、使命感が希薄な被害者のやる気を起こさせる為に、ハーレムやらチートを出汁に利益誘導して、物語に刺激を増やすのも判らんでもない。

.....

あくまで、当事者で無ければな。

しかし、全く遺憾な事に、俺は、その当事者となってしまった。前兆も全く感じさせない平凡な日々。

然るに、突然、輝く鏡のようなモノが俺の目の前に現れれば、やる事は一つ。

逃げる事に決まってる。

君子、危うきに近寄らず。

怪しいと自己主張してるような不思議現象には、関わらないのが、日本の小市民の正しい有り方。

しかし、残念。

車は急に止まらない。

使い古された標語のように、自転車に乗った俺は、ゼロ魔の世界へ

吸い込まれていったのさ。

気が付いたら、桃色の髪の少女が目の前に居て、皆にルイズって呼ばれてるし、俺の事指差して、皆が、平民呼ばわりしてる。

何で？運動神経ゼロの俺がルイズに召喚されるのかね？

ガンダールヴって、体育会系のルーンだよね？

運動神経ゼロで、ご主人様の詠唱を体張って支えるって、可笑しくない？

そりゃ、魔法世界とは言え、基本的には中世ヨーロッパ程度のハルゲニアに、召喚されるんだから、現代知識はチートだよ。

それも、立ち位置が、平賀才人の代わりで、アニメやら小説やらのゼロ魔の知識を持ってるんなら、ハーレム確定だよ。

俺は才人みたく、鈍くも無けりゃ、初心でも無いからな。

ただし、ルールに用意された死亡フラグをどうにか出来ればの話だ。はつきり言って、俺は弱い。

自信を持って、高校生の才人より弱いと断言できる。

ましてや、凹られても、『下げたくない頭は下げられねえ』なんてカッコいい台詞を言えるような根性も持ち合わせておりません。

正真正銘のヘタレです。

だから、すぐに起きるであろうギーシュとの決闘イベントすら、死亡フラグに見える俺に、ゼロ魔の知識なんて意味があるんだろうか？

ここが、ゼロ魔の世界だと気が付いて、鬱々と考え込んでる内に、

俺の周りは勝手に話を進め、俺はルイズにキスされた。

そして、コントラクト・サーヴァントに因って刻まれるルーンのアマリの痛さに意識を喪った。

って、おい？

才人は、熱いっただけで済んだのに、何でだよ。

プロローグ（後書き）

使い魔の能力

気が付いたら、夜だった。

場所は、ルイズの部屋。

コントラクト・サーヴァントの痛みで、気を喪って、ここに運び込まれたらしい。

目覚めたのが、ベットの上でなくて、床に置いてある藁の塊の上である事を考えると、俺に対する扱いは、才人と同じらしい。

「気が付いたの？ 契約の最中に、気なんか失わないでよ！」

桃髪のルイズさんが、ぷりぷり怒りながら、俺を覗き込んでいる。

「同意もしてないのに、勝手にルーンを刻んでくれた奴の台詞か？」
痛みに耐えられなかった自分が、情けないとは思うが、だからと言って、怒られる理由はない。

怒る理由はあるがな。

「平民が、貴族に、なんて口利くのよ。申し訳ございません、ご主人様でしょ？」

ん、ぷりぷりが、ぷるぷるに、怒りの度合を高めてきてるらしい。
桃髪娘には、色々、言いたい事が山ほどあるが、ヒステリーに付き合っても、こちらの飯が抜かれるだけだし、道理を説くのは諦めよう。

なるべく、申し訳なさそうな顔を作り、これから養って貰わなきゃならんこのお嬢さんに、心にも無い事を言ってみる。

「すみません。貴族のお嬢様。突然、使い魔になって、動揺しておりました。」

ルイズさん、俺の謝罪に、機嫌は直ったらしい。

それで良いのよと言いながら、俺の事を根堀、葉堀、聞いてきます。

「どこの平民？」

「ロバ・アル・カリイエの生まれです。貴族のお嬢様。」

「ルイズで良いわ。へえ、エルフの国の向こう側なの？」

「ハイ、ルイズ様。ところで、使い魔って、どんな事すれば、よろしいのですか？」

「大抵は主人の耳や目になる探索系か、秘薬探しの採集系、もしくは護衛ね。タバサみたいに風竜みたいなのが使い魔なら移動系もするけど。」

そして、ルイズさん、期待に満ちた目で、聞いてきます。

「貴方は、何が得意？」

これは、困りました。

秘薬って何？みたいな俺に採集を期待されても困るし。

硫黄くらいなら火竜山脈まで、足を伸ばせば、採って来れるけど、

ガリアとロマリアの国境では、遠すぎて問題外。

鉱物なら兎も角、植物なら見ても判らん。

かといって、護衛は無理。絶対無理。

刻まれてるルーンは読めないが、仮に設定通りだとして、ガンダー
ルヴのルーンだとしても、俺にそんな根性有りません。

かといって、何も出来ませんでは、失望されて、才人と同じ犬扱い
になるだろうし。

どうする、俺？

ルイズさんを喜ばせる力なんて、思いつかないぞ。

考える、何か無いか？

うーん、、、そうだ！

「ルイズ様、あなた様の使い魔にして頂き、刻まれたルーンが、私
に、使い魔としての力を与えてくれました。」

「どんな力よ？」

「マジックアイテムを探索する能力です。」

「何それ？」

「不定期ではありますが、人知れず埋もれたマジックアイテムを直
感で、探し当てる事が出来るようです。」

「へえ、変わった力ね。」

「ルーンが力について、囁いてくれたので、能力は判りますが、具体的に、どんな方法で見つけるのかは判りかねます。」

俺は、ルイズさんに、苦笑気味の表情を作りながら報告する。

もちろん、そんな能力は嘘っぱちだ。

ヘタレの俺が、ガンダールヴの能力を持っても仕方が無いし、ルイズ嬢には怖くて言えない。

ばれたら最後、何をさせられるか、判ったものではない。

故に、竜の羽衣とか、破壊の杖をネタに、なるべく虚構の能力でお茶を濁させて貰おう。

最初の死亡フラグ、シエスタがギーシュに絡まれるイベントは、シエスタからマジックアイテムの軌跡が見えるとも言って、ルイズさんに助けさせよう。

それを手掛かりに竜の羽衣イベントを進めれば、能力がホントらしく見え、安全第一のルート構築に希望が持てるかもしれない。

決意

少しは役に立ちそう。と、思わせたのが成功したんだろう。

お話がお開きになり、

「喋ったら、眠くなっちゃったわ。」

と欠伸をするルイズさんに、

「私はどこで、眠ればよろしいのでしょうか?。」

と聞くと、ルイズさんは鷹揚に、藁のある床を指差しました。

掛け布団の替わりに、毛布もくれました。

しかし、その後で、

「着替えるから少しの間、部屋から出てないさい。」

と仰る。

助かりました。

才人のような聖人君子じゃない俺としては、目の前で、着替えられた上に下着でも飛んできた日にゃ、我慢できずに襲ってしまいます。しかし、まあ呼ばれて、部屋に戻ると、籠に使用済み下着が入ってる。

それを指差し、

「明日の朝、洗濯物をメイドに渡してきなさい。」

と言われるのだから、理性と本能の均衡は、微妙な関係です。はい。ネグリジェ姿のルイズさんは、ベットに潜り込むと、パチンと指を鳴らし、ランプを消し、じきにスヤスヤと寝息を立て始めた。

.....

.....

.....

.....

俺のほうは、コントラクト・サーヴァントで気を喪ってから、夜中まで寝ていたのだから、眠いはずも無い。

短期的には、死亡フラグの回避に手掛かりを掴んだけれど、長期的

には全く不安だ。

これからの事を考えると、余計に目が冴える。召喚前に、小説を19巻まで読んで来てはいるが、その中に帰る方法もヒントすらなかった。

つまり、余程の幸運が無ければ、この無法世界で、生活しなきゃならんだ。

考えれば、考えるほど、目の前は暗くなり、頭は痛くなる。

才人を主人公とした正規シナリオでは、基本的にガンダールブの能力を生かして、才人が体を張ってシナリオを進めている。

つまり、サイトは、思考も行動も体育会系なのだ。

文系の俺には、怖くて真似できないし、真似しない以上、シナリオも正規ルートからほとんど外れていってしまう。

日本のようなぬるい世界なら、歩くニトログリセリンのような危険人物のご主人様からは速攻で逃げ出し、市井に紛れて、安全安心の人生、鉄板の人生を歩む事も可能だ。

しかし、ここはハルゲニア。

近代国家以前の無法世界だ。

貴族だ、王家だと高らかに誇られても、俺から見れば、土着の野蛮人にしか見えん。

ココは安全だと思って、平和な町や村に住み込んでも、ある日、予兆も前兆も無く戦火で命も財産も燃えてしまう可能性がある。

ある程度、この物語のメインキャラにコバンザメの様に引っ付いて身を守る手段を得る事が、どうしても必要だ。

もちろん、物語が体育会系である以上、俺にはキツイ。

死亡フラグを避ける為に、正規のルートをどうしても外れてしまう。それを必死に修復し、繋げ続け、危険人物のガリアの狂王とか、ロマリアの凶皇とか、頑張って排除する必要がある。

そして、なるべく多くの安全対策と危機管理を講じて、安全、安心、一昔前の日本の治安のような生活を送るのだ。

涙目になりながらも、俺は、悲壮な決意をした。

朝、シエスタ発見。

翌朝、聞きなれた目覚ましの音で、目が覚めた。

一瞬、昨日の出来事が夢であったのかと淡い期待を持つが、背中から伝わる感触は敷き布団でなく、藁のガザガサした感覚だし、開いた目に映るものは、石造りの天井だ。

頭が、少しばかり覚醒してきて、ズボンのポケットに携帯電話を入れている事を思い出す。

アラームを朝の7時半に設定してあったから、律儀に起こしてくれたのだろう。

もともと、異世界に召喚されているのだから、時間がどれくらいずれているのかは知らない。

ただ、ハルゲニアは、地名や地図の形を見れば、出来の悪いヨーロッパ西部だけど、日本からヨーロッパに飛行機で飛んできたような十時間もの時差を感じさせるような感じではなかったから、時間はずれておらずに、携帯の時計も正確な時を刻んでいるのかもしれない。

しかし、充電できない携帯電話をこのまま持っていたても、3日くらいで電池を喪うのでは無かるうか？

充電の目処は立っていないけど、とりあえず、電源を切っておくのが良いだろう。

起き上がり、携帯の電源を切り、服に付いた藁を払いながら、養い主となったルイズさんが求めそうな事をしていく事にする。

先ず、ルイズ嬢のタンスを漁り、着替えの下着と服を準備する。

ルイズ嬢を世話のかかる大きな妹だと思えば、これ位は、出来ない事も無い。

準備した衣類をベットで寝ているルイズさんの脇に置いてから、彼女を起こしに掛かる。

「ルイズ様、起きてください。朝でございますよ。」

「んっ、あんた誰？」

「使い魔の各務真吾にございます。」

んっ口調は、使い魔というより、執事だな。
セバスチャンって名乗った方が良かったか？

「ああ、使い魔ね。昨日、召喚したんだったわ。」

「ところで、ルイズ様、洗顔の準備をさせて頂きたいのですが、水はどこから持ってくれば良いのですか？」

「そ、そうね。下に降りて、水汲み場があるから汲んできて。」

「畏まりました。」

一礼して、扉から部屋を出て行く。

昨日、彼女の着替えの時に、部屋の外に出され、階段の位置を見つけていたから、迷わず、階下に降りて行く。

降りた先で、黒髪のメイドさんを見つける。

黒髪って言えば、シエスタだね？

「すみません！」

「ハイ、なんででしょうか？」

振り向いたシエスタは、特徴ある黒い髪を、カチューシャで纏めて、そばかすのある如何にも素朴って感じの女の子だった。

俺がジロジロと、彼女を観察してるものだから、心配そうに

「どうかなさいましたか？」

と聞いてくる。

とりあえず、ルイズさんを待たせるのは不味いので、用件を済ますことにする。

「水汲み場の場所を教えてくださいませんか？」

「あ、はい、ココをずっと真っ直ぐ行ってもらい、右側の出口から外に出ると左手に見えますよ。」

シエスタ、につこり笑って、親切丁寧に教えてくれる。そして、

「あなた、もしかして、ミス・ヴァリエールの使い魔になったて言う・・・」

彼女は、俺の左手のルーンをチラリと見ながら、そう、言葉を続け

る。

時間をココで潰すとルイズさんの機嫌が悪くなるので、手早く自己紹介をする。

彼女も仕事中だし、ゆっくり世間話してる時間は無さそうだ。

ルイズさんに昨日渡されて、部屋に置いてきた洗濯物を、どこに持っていけば良いのかをついでに聞いた後で、挨拶も簡単に、早足で水を汲みに行く。

シエスタと早々と顔を合わすことが出来たのは良かった。

等と考えながら、早足で、ルイズさんの部屋へ戻って行った。

キュルケの自慢、不発。

部屋に戻り、水桶の水を洗面器代わりであろう大きな陶器の深皿に注ぐ。

ルイズさんが石鹸で顔を洗い、水で泡を落としたところで、控えていた俺が、タオルを渡す。

彼女が、顔を拭いている間に、汚れた水をどこに捨てようか、辺りを見渡すが、排水設備など見当たらない。

仕方が無いので、中世世界らしく、窓の下に人が居ないことを確認して、サーツと水を捨てた。

公衆衛生の観点から見れば、下水、上水とゴミの収集は絶対と思うが、望んでも仕方が無い。

その割りに、ルイズさんの着ている制服の上衣、ブラウスは白いのだから、驚かされる。

白いミディブラウスに短いプリーツスカート、それにハイソックス。元居た世界なら、20世紀初頭にならなきゃ、見られない装いだ。

確かに、ココに居る学生達は、貴族様^{メイジ}なのだから、毎日、洗い立ての白い下着やシャツを着る経済的余裕はある。

しかし、産業革命の芽が出るか、出ないかの時代に、貴族様の^{だれ}、学校の制服が、白いブラウス^{でもきている}ってのは、如何に、貴族様^{メイジ}が、大きな顔をしてるのか。

嫌でも判ってしまうな。

身分の隔たりは、想像以上に大きいらしい。

ちょっとした、カルチャーショックを受けていると、ルイズさんは、部屋の外へ出る準備が整ったらしい。

「朝食を食べに行くわよ。」

と、仰るので、すばやく扉に行き、頭を下げながら開ける。

うん、日頃のバイトの成果が、出てる気がするよ。

しかし、扉を開けると、そこには、メロンが居た。

燃えるような赤い髪のメロン。

違う、キュルケだ。

キュルケが居た。

頭を下げつつ、視線はメロンに釘付けの俺に、ルイズさんは、気が付いておらず、ジツとキュルケを見てる。

いや、俺、動揺しすぎ。

例え、抜き打ちで、視覚に入ったのが、ブラウスを第2ボタンまで外し、零れんばかりに自己主張してるメロンだったとしても、これは危険すぎる。

坊やじゃ無いんだから、火薬庫の周りで火遊びに勤しむような行為は、すぐに辞めねばならん。

名残惜しいが、如何にも未練は全く無いよう無関心を装いつつ、視線を外す。

彼女は、ルイズさんを見ると、ニヤツと笑って言った。

「おはよう、ルイズ。」

ルイズさん、嫌そうな顔を隠しもせず、不機嫌そうな口調で、

「おはよう、キュルケ。」

と、テンションの低そうな声音で、挨拶を返しています。

小麦肌の健康的なキュルケさん。

チラチラと俺を見ながら、ルイズさんに馬鹿にした口調で言っています。

「あなたの使い魔って、これ？」

「そうよ。」

「あつはは、ホントに人間なのね！凄じじゃない！」

キュルケさん、心底、可笑しいと言う風情で、満面の笑みで言葉を続けます。

「サモン・サーヴァントで、平民を、喚^よんじやうなんて、貴女らしいわ。流石わ、ゼロのルイズ！」

ルイズさんの頬が赤く染まっています。

「煩いわねあゝ。」

明らかに、ルイズさん、不機嫌モードです。

んゝ、俺を出汁にして、ご主人様をからかうなんて、何て酷い奴なんだ。

そのとばっちりは、俺の朝食で清算させられる気がするぞ。

キュルケさんには、悪いが、自慢話の腰を折らせてもらおう。

「ルイズ様、朝食に遅れます。急ぎませんと！」

ルイズさんも、面白くも無い会話を続ける気は無かったようだ。

「そうね！じゃ、キュルケ、又、後でね。」

そう言い置いて、

「えゝちよつとゝ、待ちなさいよゝ」

と叫んでるキュルケさんを後に、アルヴィーズの食堂に向かったのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520n/>

ゼロ魔の大革命

2010年10月8日11時46分発行